12/13
福井

南スーダン 駆け付け警護

任務失敗なら批判の的

陸自幹部懸念 「攻撃 どう対処」

南スーダンの国連平和維持活動（PKO）で新任務を付与された陸上自衛隊11次隊は12日以降、これまでとは異なる立場で紛争現場に身を置くことになる。陸自幹部は、仮に「駆け付け警護」や「宿営地の共同防衛」の任務に失敗すれば、批判の矛先は自衛隊に向かいかねないと懸念する。【1面に本記】

▼傍観に批判

小銃を抱え、横一列になって進むエチオピア部隊。南スーダンの首都ジュバにある避難民キャンプの外周パトロールだ。1日4回。約20カ所の見張り台にいる同僚に声を掛け、異常の有無を確認する。

エチオピアは隣国南スーダンのPKOに1200人余りを派遣する主力隊の一つ。駆け付け警護や共同防衛の最前線に立つ部隊だ。「すぐ現場に駆け付けられるよう、24時間態勢で警戒している」。部隊の広報担当者は「われわれはソマリアのPKOなどで実戦を経験している」と能力に自信を示す。

しかし7月にジュバで起きた大規模戦闘で、エチオピア隊は批判の矢面にも立たされた。国際機関職員らの宿泊施設の救助要請に応じなかったためだ。避難民キャンプで暮らすジョセフ・マティクさん(43)も「市民を助ける力があるのに、なぜ傍観したのか」と憤りを隠さない。

宿泊施設を襲撃したのは政府軍の兵士。自衛隊の新任務の相手も、政府軍の兵士や関係者となる可能性は高い。死傷者が出れば政府との対立は必至だ。「政府軍から攻撃を受けたら、どう対処するのが正解なのか」と陸自隊員は頭を抱える。

▼拒否できるのか

陸自は実際の任務で一発の銃弾も撃ったことがないが、安全保障関連法で任務遂行目的の警告射撃が可能となった。陸自幹部は「隊員にかかる精神的負荷は相当強いはずだ」と懸念する。

「実戦経験の欠如がどう影響するかは分からない。確かなのは射撃する際の一瞬のちゅうちょが、部隊の全滅につながりかねないということだ」

駆け付け警護は限定的な場面で、能力の範囲内で行うとするのが日本政府の立場。7月のような大規模な戦闘は「駆け付け警護ができるような状況ではない」（稲田朋美防衛相）との見解だ。

ただ、別の陸自幹部は「激しい戦闘が起きた際、在留邦人の救助要請を自衛隊は拒否できるのか」と自問。「断ったり、任務に失敗したりすれば、自衛隊への国内外の非難はすさまじくなるだろう」と覚悟する。

国連は7月の戦闘でPKOが民間人保護に失敗したことを問題視し、ケニア人司令官を更迭した。この陸自幹部は「（任務に失敗すれば）政治は助けてくれない。ケニアの二の舞いになるのではないか。待っているのはトカゲのしっぽ切りだ」と不安感を吐露した。（ジュバ、東京共同＝稲葉俊之、園田聖）